

Hさんは、名前のおり温厚な、春のように穏やかなかたでした。人一倍気を遣い、何かしてもらったら必ず「お礼を」という方でした。

親戚にあたるMさんを知っていた私は、まるで正反対のお二人だな、とっていました。頭が良くて家柄の良いところは同じですが、男勝りなMさんに比べて、Hさんは万事において控えめでした。コンサートやカラオケクラブでも歌わず「鑑賞する」側でした。「私は音痴だから」と恥ずかしがっていましたが、だから歌のうまい職員に感動したのかな、と思います。感情をあまり表さないけれど、内には熱いものを秘めておられたのではなかったか、と想像します。きっと今治の女学校に通った娘時代から嫁ぎ先でも、親に尽くし夫に尽くし子どもに尽くしてこられた「よき娘・妻・母」のお手本だったのだろうな、とHさんの影に「古き日本の女性」を見る思いでした。ただ、晩年になるとずいぶん自分を抑えていた垣根が取り払われて、特に吾も紅で過ごされた半年の間には大きな声で調子はずれの曲を歌い、ガハハ、と笑う姿がありました。初めは「帰りたい」と泣いておりどうなるか…と思いましたが、すぐに皆さんとお皿を拭いたり野菜を切ったり…と集団生活に馴染まれたので驚くとともに安心しました。もちろん、その裏には毎日顔を見せてくれる娘さんの姿があり、「あの子はねえ、よく気がつくの。何でもできるの」と誇らしそうで、娘さんを褒められると、とても嬉しそうでした。

Hさんはある意味幸せな方だったのではないのでしょうか。人の世の嫌なことをあまり知らず、温かい家族に囲まれて愛する娘さんの側で静かに息を引き取られました。こんな亡くなられ方は、そうは見られないと思います。Hさんだったからこそ、穏やかで安らかな最期を迎えられたのだと思います。ターミナルであったのに、苦しいお顔を見ることが一度もありませんでした。神様に愛されていたのかな、と思います。今頃、御主人やご両親と再会し和やかに話されているかもしれません。平成から令和へと時代が移ろうとする前夜、大正の世に生まれた貴重な世代がまたひとり天に召されたことを残念に思います。Hさん、どうか、その優しい微笑で現世に生きていく私たちを見守っててください。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。たくさん思い出をありがとうございました。

